HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	和泉式部物語の研究 [全文の要約]
Author(s)	岡田, 貴憲
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第11175号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/55337
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Takanori_Okada_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

平成二十五年度
北海道大学大学院文学研究科　言語文学専攻
学位（課程博士）申請論文

和泉式部物語の研究

岡田　貴憲

論文内容の要旨

本論文は、今日「王朝女流日記文学」の範疇で享受・研究されている平安期の仮名散文作品『和泉式部日記』を、諸本の大多数が冠するもう一つの題号『和泉式部物語』に則り“物語”として捉え直すことの可能性と意義を探究するとともに、三条西家本・寛元本・応永本の各系統写本が擁する異文について、当該作品の書写者・読者による物語享受の諸相とみなす見地から、相対的に読解することを試みるものである。本論文は第一部・第二部の二部構成を採り、各編を内容に応じて次の通り配置する。

第一部『『和泉式部物語』論序説」は、第一章「『和泉式部物語』の語り手」・第二章「「書きなしなめり」の解釈と“前提的基層”」・第三章「『和泉式部物語』諸本論の再検討」の計三章から成る。各章では、『和泉式部日記』を“物語”として捉え直すための前提となる手続きとして、当該作品が“物語”性を内包して作られ、実際に“物語”として享受されてきた事実の確認を各々に異なる視座から行う。

第二部『『和泉式部物語』本文の相対研究」は、第一章「「童遅参」記事の解釈」・第二章「「紅葉狩り」記事試論」・第三章「「神世より」の和歌解釈」の三章に、付章「扶桑拾葉集本本文成立試論」を加えた計四章から成る。主たる三章では、享受された“物語”としての『和泉式部物語』諸本を相対的に把握する実践の試みとして、これまでその解釈に揺れがみられた三条西家本の本文を他系統本文と等しく並べ、各本文に従った正しい解釈の確定と、本文対立発生の経緯についての導出作業を行う。付章では当該作品の享受に関わる周辺問題として、近世期以降の『和泉式部物語』享受に多大なる貢献を果たしながら、その本文が他系統本文の混成であることを理由に長らく研究の場から排除されてきた扶桑拾葉集本を俎上に載せる。以下、各章の概略を示す。

◆第一部　『和泉式部物語』論序説

第一章「『和泉式部物語』の語り手」では、作中人物を全知視点から描写する当該作品の視点の問題を取り上げる。“日記”の限定視点に抵触するこの問題を解決する通説は「超越的視点」「主客未分の叙述」の各説明原理だが、両原理には論理面での破綻が確認される。そこで代替の説明原理として「客観カメラ」の概念を導入すると、従来の問題箇所は全て物語特有の表現技法「草子地」「視点の融合」に則して説明できることが明らかとなり、それらの表現を備えた当該作品を“物語”として捉えることの妥当性が導かれる。

第二章「「書きなしなめり」の解釈と“前提的基層”」では、跋文解釈の問題を取り上げる。諸注が「創作」の意に解し、作品本篇の事実性の表明とみなしてきた跋文中の一節「書きなし」は、正しくは「意図的な書き変え」と解すべきである。この解釈に従うと、作品終末部における帥宮北の方と東宮女御との往復書簡が現実の改変であり、その内容が“前提的基層”すなわち跋文筆者と読者とが共有していた人物世評とは異なっていることへの断りとして、同跋文が記されているとの考えが得られる。

第三章『『和泉式部物語』諸本論の再検討』では、当該作品の写本における和歌書式の問題を取り上げる。現存する物語写本において和歌は改行・字下げを施されるのが一般だが、平安期には和歌を地の文に続ける和歌同行書式が使用されていたと考えられる。当該作品の場合も全系統写本に和歌の埋没例があることからかつては和歌同行書式の写本で享受されていたと考えられるが、とりわけ寛元本・応永本の写本に和歌の混入がみられることからは、両系統の写本が三条西家本に劣らず本文面で古態を留めていることが推測される。

◆第二部　『和泉式部物語』本文の相対研究

第一章「「童遅参」記事の解釈」では、十月条の「童遅参」として知られる記事を取り上げる。同記事中の「人」の語は従来「童」と解するのが通説だが、正しくは「従者」と解されるべきである。また三条西家本の「とはせたれば」なる一文は、文法的には読解に破綻を来す損傷本文である。そこで同箇所について寛元本・応永本の本文を参照すると、他系統本文が読解可能である一方で三条西家本の本文には改変が加えられていることが知られる。このことから上記の損傷本文は本文改変の失敗により生じたことが推定される。

第二章「「紅葉狩り」記事試論」では、作中最も難解な「紅葉狩り」記事を取り上げる。解釈上の対立点である三条西家本の本文「とふ〳〵」「ふかくなる」を他系統本は「のど〳〵」「をこならん」とするが、この対立は物忌の当事者に関わる別の独自異文と関わっており、三条西家本では女と帥宮との立場を逆転するために本文改変が行われたとみられる。「のど〳〵」から「とく〳〵」への反転を発端とするこの改変は、後半の和歌贈答でも詠主の逆転という形で反映され、記事を通して一貫した文脈改変意識の存在が確認される。

第三章「「神世より」の和歌解釈」では、十一月記事冒頭の「神世より」歌とその直前の地の文を取り上げる。同歌第三句「雪なれば」は他系統本には「雪なれど」とあり、三条西家本の誤写が想定される。一方、地の文には「いたくふる」と「うちふる」の対立があり、前者では初雪が多量に降るという三条西家本の描写の特異性が確認される。この独自異文は、上記の誤写を契機に変更された和歌解釈と、地の文とを符合するための改変の結果であり、三条西家本の現存本文は他系統本とは異なる文脈として読解可能と判断される。

付章「扶桑拾葉集本本文成立試論」では、扶桑拾葉集本における本文混成状況と内部系統の成立事情とを取り上げる。本文混成には応永本系統・享禄奥書本系の青山会文庫本に近い写本と、寛元本系統の黒川本に近い写本との二本が用いられ、さらに編纂開始直後の板行である寛文板本が加えられている。内部系統については現存諸本の間に一次草稿本と二次草稿本とが想定され、前者に由来する御所本と、献上本の母体である後者に由来する「したつふみ」との折衷によって、流布本たる元禄板本が作られたと考えられる。

以上、全二部七章から成る本論文は、三条西家本中心の善本主義の枠組みから解放された、多様な『和泉式部物語』注釈の可能性と必要性とを発揚して閉じられる。